

農業総合研究所の上場で思いっきり

6月16日、(株)農業総合研究所(代表取締役・及川智正氏)が東京証券取引所マザーズ市場への上場を果たし、それを記念するパーティーが8月19日に東京のパレスホテルで開催された。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

及川さんは創業から間もない2009年3月3日に開催された第1回の「A・1グランプリ2009」に出場し、「日本のド真ん中で農産物直売所をOPEN全国ネットワーク直売所『みんなの直売所』」という現在のビジネスモデルを発表して特別賞(JA・ICシードキャピタル賞)を受賞している。この受賞には後日談もあった。農林中金のベンチャーキャピタルであるJA・ICシードキャピタルの当時の社長が

ヤピタルの当時の社長が激賞して選んだ特別賞なのに、大会後、及川さんの地元系統組織よりのクレームで、同賞の賞金提供が取り消されてしまったのだ。でも、それも勲章と言わなければならない。地元農家の娘さんと結婚した若者が始めた新事業に当初は反発していた地元農協もやがてそれを歓迎せざるを得なくなった。和歌山という小さな地域の枠を越えて全国ネットです

の役割が認められて今回の上場となったからだ。

奥さんの実家でキュウリ作りをする農家修業に始まり、こんなことやってられないと始めた新規事業。地域の農家の野菜を集めて直接小売の店先に品物を置くこと。スーパーなどにインショップの形で「直売所」を運営すること。中を抜くというだけでなく、全国のスーパーで生産者がお客さんに「ありがとう」と言われる場作りを目指したのだ。その事業は着実に全国の農家の支持を得ると同時に大手スーパーや全国各地の地方スーパーにも出店を求められるようになった。50万円の手持ち資金で始まり、上場を果たした今年6月にその資本金は1億9900万円まで増資されている。さらに国内市場だけでなく海外展開を目指して次のステップに駆け上ろうとしている。

及川さんの上場をうれしく思う最大の理由は、なんでも補助金に頼りたがる農業発の事業で、補助金ではなく上場という手段で成長を目指しそれを実現したことである。及川さんの事業は「農業」というより「卸売業」であるわけだが、農業と同様に現在に安住しつつ新たな展開を示

すことができずにいる農産物流通業界の革新こそが農業経営を進展させる。

未だに農業の生産過程に大企業が愚かにも進出して苦しんでいるが、そもそも資本回転率の低い農業の生産過程に大企業が参入すること自体、株主代表訴訟を受けるものだと僕は思っている。農家の体験を通して新たな青果流通と農業の可能性を開いた及川さんの取り組みに農業参入を考える企業人は見習うべきだ。

農業総合研究所は農業あるいは農産物流通業の「現在」を乗り越えた。しかしその「現在」は既得権者の利害が優先されてきたために変化を阻まれてきた「過去の結果」なのである。農業や日本の社会が大きく変化しつつあるいま、「現在」はすぐに「過去」になってしまおう。「未来から逆算」して現在をどう乗り越えるかが及川さんの次の課題であろう。

同様に、トウモロコシの産地卸あるいは中間貯蔵設備の設立。これも同じ課題なのである。本誌がトウモロコシ生産を呼びかけ始めた数年前と比べて需要業界は大きく変化している。円高が進行して輸入トウモロコシが割安に入ってくるようになってしまった。生産過程の変化だけでなく中間流通が未来から逆算するいまを作っていたきたいのだ。